



# 歩いて知るきのくに歴史探訪 高野山 奥の院を巡る

古絵図で歩く高野山文化財マップ-奥の院地区-



左上段左：奥の院御廟周辺出土一石五輪塔  
左上段右：朱字入り一石五輪塔  
左下段：松平秀康及び同母霊屋  
右下段：奥の院御廟周辺出土白磁蔵骨器  
右中段：奥の院出土一石五輪塔

**高野山**は、弘仁7(816)年に弘法大師空海により創設された真言密教の聖地です。標高約800mを測る山上盆地に立地し、周囲は蓮華の花にたとえられた内八葉、外八葉と呼ばれる山々に囲まれています。2004年には、ユネスコ世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部に登録されました。盆地西半の尾根筋上には、空海の密教理念を具現化した「壇上伽藍」が築かれ、周辺には子院が立ち並ぶ「山内地区」が存在します。一方、盆地の東には、最奥部の弘法大師御廟に至る参道と石造物群が展開する「奥の院」が存在しています。「奥の院」は弘法大師空海の人定信仰の聖地であり、歴代の天皇の行幸や、貴族・大名の参詣が行われた、納骨・納経の一大拠点です。

**高野山奥の院**には数多くの文化財が存在し、発掘調査によって多くの文化財が出土しています。奥の院「古絵図で歩く高野山文化財マップ-奥の院地区-」では、奥の院地区の発掘調査成果を中心に、石造物の研究、文化財建造物の保存修理の成果、古絵図を交えて高野山の歴史を紹介します。江戸時代の古絵図をもとに、奥の院を巡り歩いてみませんか。



**佐竹義重霊屋** 安土・桃山時代  
**重要文化財**  
正面中央左手の柱に刻まれた彫刻銘に慶長4年(1599)と記載があるため、この頃の建立と考えられている。内部には常陸国の戦国大名佐竹義重の石塔婆が安置され、正面の棧唐戸以外の壁面には木製の卒塔婆が隙間なく並ぶといった、珍しい形式をとる。木鼻には華麗な彫刻が施されており、また外部も彩色により彩られている。



**上杉謙信霊屋** 江戸時代  
**重要文化財**  
かつては同規模・同形式の建物が東西に2棟並んでおり、西に上杉謙信、東に謙信の嗣子、景勝を祀っていた。その後、江戸末期に荒廃した両霊屋を解体し、2棟の部材を合わせて1棟を建てた。これが現在の霊屋であり、元の謙信霊屋の位置に建ち、謙信と景勝を合祀する。入母屋造、松皮葺の屋根を架ける小規模な建物で、姿は非常に優美である。外部には鮮やかな彩色や端正な彫刻が施されている。

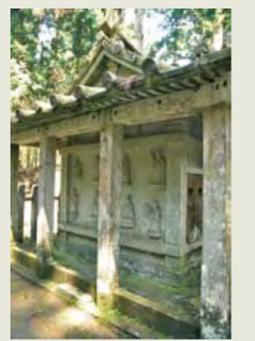


**高麗陣敵味方戦死者供養塔** 安土・桃山時代  
**県指定史跡**  
薩摩島津家墓地の一角に存在する石造卒塔婆である。慶長4(1599)年に島津義弘・家久父子が建立し、文禄・慶長の役で戦病死した敵味方の将兵を弔い、胎蔵界大日如来の浄土への往生を願ったものである。石材は琉球石を用いたとされ、この塔の粉や苔を服用すると病が治る伝承が「紀伊統風土記」に記されている。塔の左には明治に建立された英訳碑文があり、日本の赤十字精神のさきがけとして海外に紹介された。



**松平秀康及び同母霊屋** 江戸時代  
**重要文化財**  
向かって右が越前の藩祖、松平秀康(家康次男)を祀る霊屋で、慶長12年(1607)に実子忠直により建立された。左は秀康が自身の母を祀る霊屋として慶長9年(1604)に建立した。

建物はすべて石で作られた石造建築物であり、石材は越前より運ばれた笏谷石が用いられている。桁などの横架材は、石材の内部をくり抜いてコの字型とし、そこに木材を挿入し金具で緊結して補強している。秀康霊屋は入母屋造、同母霊屋は切妻造で、屋根は共に本瓦葺の形状を模した石材で葺かれている。細部の意匠も木造建造物に倣って造られており、特に秀康霊屋では軒は石材から垂木を造り出し、正面には唐破風を設けるなど、細部まで手の込んだ造りとなっている。このような造りは越前に多く見られる笏谷石の石造物でも例がなく、特異な建築物と言える。外壁には壁石から造り出した仏像が多数配され、内部には彩色が施された痕跡が残る、金箔や彩色により装飾された宝篋印塔が安置されている。



**禅尼上智碑** 室町時代  
**県指定史跡**  
中の橋を渡って、寛鑑堂の手前付近に存在する石造卒塔婆である。笠部分は欠損し柄が上部に残る。正面の長方形の窪みは、別石造りの仏菩薩をはめ込むものとみられる。銘文は、正面に「為禪尼上智聖灵、奉造立沙弥蓮阿」とあり、側面には「永和元(1375)年」と、南北朝時代の南朝の年号が刻まれている。「禪尼上智」については文献等に記述はないが、南朝の年号が刻まれた例として貴重な例である。



**崇源夫人五輪石塔** 江戸時代  
**県指定史跡**  
古絵図に「一番石」と書かれている、奥の院の石塔で最も大きいとされる五輪塔である。高さ6.6m、台石の上面で2.75㎡を測る。崇源夫人は、江戸幕府二代将軍徳川秀忠の北の方であり、子息駿河大納言忠長により寛永4(1627)年に建立されたことが塔の銘文に描かれている。台石裏には「泉州黒田村甚左衛門」とあり、大阪府泉南市の石工により製作されたことが分かる。



**第二灯籠堂建設に伴う発掘調査**  
奥の院御廟の南東裾では、埋没した杉の古株が検出された。鎌倉時代には、輸入陶磁器や、国産陶磁器を用いた納骨が行われている。また、古株の周辺には、室町時代の一石五輪塔が集積された状況で出土し、いずれも空輪を古株に向け並べている。一石五輪塔の下には、焼骨が層状に堆積しており、繰り返し納骨が行われたことがうかがえる。



**奥院経蔵** 安土・桃山時代  
**重要文化財**  
慶長4(1599)年、石田三成により建立された。内部には同じく三成により寄進された高麗版一切経6285帖が回転式の八角輪蔵に納められた(現在は霊宝館で保管)。外部は素木で装飾性が少なく、落ち着いた様相を呈する。一方で、内部は輪蔵を含む全面に彩色が施され、また輪蔵には精緻な彫刻が配されるなど、煌びやかな空間が展開される。

**一石五輪塔**  
五輪塔は平安時代末頃より遺品が認められますが、南北朝時代までのものはその数が少なく、古遺品として貴重です。ところが、室町時代になると五輪塔は、それまでに多く造られるようになります。ただし、形態は小型化したものになります。五輪塔は、一般に大衆化されて立てられ得るようになったのです。そして、室町時代の中頃になると、さらに小型化した細長い五輪塔が現れます。その形は、一つの石で造られおり、それまでの五輪塔とは、全く違うタイプのものです。これを一石五輪塔と呼びます。高野山における最古の在銘の一石五輪塔は、永享10(1438)年のものです。一石五輪塔は、それまでの通常の五輪塔に取って代わって、多く造立されます。15世紀の中頃から17世紀初めの中世石造物の大半は、この一石五輪塔で占められています。それらを詳細に調べると、大きさや、形式をはじめ、石材の変遷や信仰の形態など色々なことが見えてきます。小型化したといっても、一石五輪塔は立てられた目的などは、それまでの五輪塔との違いはありません。形態の違いは、あくまで時代の流行でした。高野山の奥の院には、この室町時代の一石五輪塔が随所に見られます。銘文が無くても、一石五輪塔と確認できれば、それは今から400~500年前の中世人が立てた遺品なのです。(木下浩良)



奥の院の一石五輪塔 最古の在銘一石五輪塔



**比丘尼法薬埋納経塚** 平安時代  
**重要文化財**  
奥の院灯籠堂新築に際し、御廟の周辺の植樹が行われた時に偶然発見された。経筒はほぼ完形で出土し、経筒蓋の表には、「天永4(1113)年5月…比丘尼法薬」という鋳出銘があり、願文の内容とともに、比丘尼法薬により平安時代に納経されたことが分かる。陶製の外容器、銅製の経筒、漆塗曲物の内容器の3つの容器からなり、内容器の中には願文・経巻が納められていた。

**奥の院御廟(奥の院御廟と周辺の整備に伴う埋蔵文化財調査)**  
高野山開創1150年の記念事業として、昭和37年~昭和39年にかけて奥の院灯籠堂の建設や、御廟周辺整備事業が行われた。それに伴い遺物が出土し、埋蔵文化財の調査が行われている。灯籠堂からは、新灯籠堂建設の基礎工事に際して、多量の遺物が出土している。灯籠堂周辺は、表土下は焼骨を含む黒褐色土層、一石五輪塔を多量に含む灰褐色土層、小型蔵骨器を含む純骨層、炭化物を含む旧表土層などが堆積する。遺物は千点以上に及ぶ一石五輪塔や、小型の蔵骨器、灯明皿が出土している。このうち、純骨層から出土した土師器の小型壺の蓋には「正中3(1326)年正月南無阿弥陀仏」の銘が存在し、この純骨層の堆積が鎌倉時代以降のものであることが判明した。鎌倉時代以降、奥の院御廟周辺には納骨が盛んに行われ、鎌倉時代には納経や、蔵骨器による納骨が行われ、室町時代以降には一石五輪塔の建立と納骨が行われた。本来、拜殿であった灯籠堂は、平安時代後期の藤原道長の参詣以降に整備され、人々の納骨の場も拡大していったものとみられる。また、奥の院御廟周辺の生垣の植樹、堀の改築、石垣の積み替えなどの工事が行われ、石塔の他、輸入陶磁器や、国産陶磁器、金属製容器を用いた蔵骨器、経塚が出土し、記録されている。経塚の中には周囲に礫が散在することから、石室が築かれたものと推定される。また、平安時代の和鏡を伴う蔵骨器も見られ、貴族層による納経・納骨が盛んに行われたものとみられる。なお、天永4(1113)年の銘がある比丘尼法薬埋納経塚もこれらの植樹に伴い発見されている。奥の院御廟周辺では、調査以前にも遺物は発見されており、明治末年には、「弘安10(1287)年」の銘のある南保又二郎入道の遺骨が納められた鎌倉時代の金銅宝篋印塔と、奈良時代の鋳出銅板三尊像が出土している。この他に、飛鳥時代の金銅製光背や、金銅菩薩像、平安時代の金銅板基台などが出土し保管され、出土品の多くは重要文化財に指定されている。このように発掘調査や出土品からも、奥の院御廟は、弘法大師入定信仰の聖地として、納骨・納経が行われてきたことが裏付けられている。



左：南保又二郎金銅宝篋印塔 右：奥の院出土光背  
奥の院出土一石五輪塔

奥の院御廟周辺の出土品の発見箇所

歩いて知るきのくに歴史探訪 ~高野山奥の院を巡る~  
古絵図で歩く高野山文化財マップ-奥の院地区-  
平成22年10月30日発行  
発行:財団法人和歌山県文化財センター (〒640-8404和歌山市湊571-1)  
編集・作成:田中元浩(埋蔵文化財課)  
協力:木下浩良(高野山大学図書館)・結城啓司(文化財建造物課) 印刷:株式会社ウイング  
\*この見学会は平成22年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業の補助金を受けて実施しています。